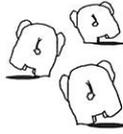


# じやりみち

……仮設支援情報……



第58号 発行日 98.12.24

被災地NGO協働センター

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

TEL:078-685-0068 / FAX:078-685-0071

E-mail:SHB00846@nifty.ne.jp

口座番号:01180-6-68556 (郵便振替)

いよいよ1998年も大詰めを迎えようとしています。この一年、被災地にとって、自分にとって、一体どんな年だったんだろう。ふと気がつけば、年明けには震災から数えて5度目の1月17日が巡ってきます。

みなさんにとって1998年はどんな年でしたか? 来るべき1999年がみなさんにとってよい年でありますよう。

お世話になったすべてのみなさんに、ありがとうございました。よいお年を!!

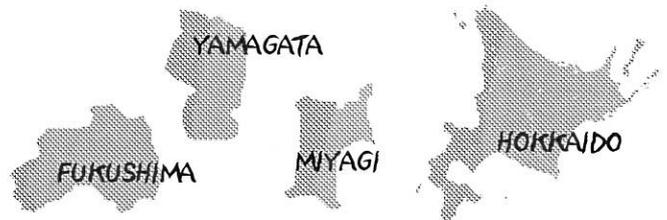


## 「まけないぞう～ありがとうキャラバン隊」 最終レポート

10月1日神戸を出発し、北海道～東北～北陸～北関東～関東と約2ヶ月、全走行距離約10,000kmを走った「まけないぞう～ありがとうキャラバン」は、11月27日無事全日程を終了して神戸に戻ってきました。清里のやまと幼稚園の園児に「ガンバッテ!」と送られてから、各地で新しい出会いや奇跡の再会、そしてたくさんの「嬉しかったぞう!」を頂いて帰って来ました。

被災地の製作者にキャラバンレポートや新聞記事を見せ話を伝えると、「私たちの知らないところであんだ達ががんばってくれているのね」と喜んでくれています。私たちは製作者、タオル提供者、タオル購入者等の皆さんの”人の輪”によってたくさんの感動を受け、元気をもらい、そして様々な「ありがとう」をキャラバントラックに積みきれないほどに満載して帰って来ました。逆に私たちが「ありがとう」と皆さんに感謝しなければならぬと思っています。

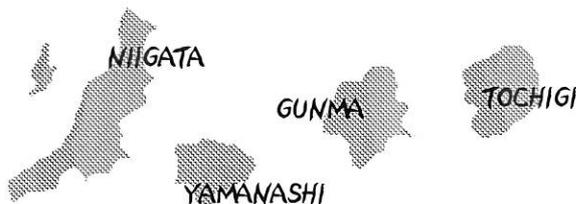
作り手は今度のことがきっかけで「また作る励



みが出るわ」と言っておられます。ある方は「私はまけないぞう作りがリハビリになっているの」と言っておられ、仮設に関しこもりの友達にも声をかけ、作り手を広げておられるとのこと。

こうして全国の皆さまに支えられて、「いま」被災地では「まけないぞうパワー」が広がっているようです。「まけないぞう」の新バージョンとして”リングぞう”一別名「まけないぞうの人の輪」がキャラバンで初お目見えをしたのですが大好評で、支える支えられるの関係を乗り越えて「まけないぞうの輪」が広がっています。

今回のキャラバンで多くの財産を得ました。中でも何げなく言ってきた「ありがとう」という言葉に、新しい気づきを得たことが成果です。それは「～させてもらってありがとう」という感覚が大切だということです。普段何げなく「ありがとう」と言っているのですが、改めてこの「ありがとう」という意味を考えさせられたのが今回のキャラバンだったように思います。



お世話になった皆さん! ありがとう!

たくさんの出会いを頂いてありがとう!

そして様々な「ありがとう」にありがとう!!



(被災地NGO協働センター代表 村井雅清)

私たちは大きなことはできません。

ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

## 「仮の町」に命を守るための館がやってきた 仮設住宅から復興住宅へ～西区編

『グループホーム』というのは、虚弱、要介護、痴呆症の高齢者などが介護スタッフと一緒に住む住宅です。兵庫県内には昨年3月末までに13ヶ所のグループホームが建設されていますが、痴呆症の高齢者のための施設は絶対的に不足しているのが現状です。そんな中、被災地初の新しい試みが産声を上げようとしています。

阪神・淡路大震災から間もなく4年が経とうとしています。4度目の冬は仮設住宅に取り残された人々にとって、これまでのどの冬よりも寒々と辛いものとなっています。

いま第7仮設住宅は、1,060世帯(1,800人)あつた人口も150世帯(200人)と少なくなり、残された高齢者達は、再び孤独に苦しんで日々寂しい思いをされています。まだ復興住宅への切符を持っておられない方が10名いらっしゃいます。この方達は「いつになったらあたるのさうか」「本当にあたるのさうか」「淋しい。知り合いが先に出て行ってしまったもんねえ」と淋しい日々を過ごしていらっしゃいます。このような方達が外気と途絶え、家の中で閉じこもってしまうのです。

中には環境の変化に伴って、痴呆症が出現する人もいます。西神第7仮設住宅において当初(平成7年)は痴呆症の方は3人でしたが、今では30~40人となっています。その中の何人かは一人で復興住宅へ転居され生活をされています。また、復興住宅に移ってもすぐに痴呆症がひどくなり、身の安全を確保するために施設へ入っている人もいます。痴呆症の一人暮らしの場合は本人および他者への危険が大きいのです。

先日もこんな事例がありました。一人暮らしのおばあちゃんがおつゆを炊いていましたが、鍋がすっかり火の上に乗っていないため半分炎が上がっていました。またオーブントースターにお餅を乗せたまま忘れてしまって、煙が出ているのにわからない…。このように日常生活を危険な状況で過ごしていらっしゃいます。

そこで私たちは本人と他者の身の安全を確保するために、仮設住宅がある限りとして「仮設のシルバーサポートハウス」(いわゆるグループホーム的存在)を仮設住宅を活用して運営することになりました。このハウスは15世帯程度の仮設住宅をバリアフリーに改造し、ボランティアスタッフが24時間常駐して生活支援や介護を行い、仮設住宅に取り残された虚弱高齢者・痴呆症の方を対象にします。点在している痴呆症・虚弱高齢者が恒久住宅や福祉施設へ移転されるまでの間、心身共に安定した生活を過ごしていただくためには生活環境づくりを図ることが望ましいと思ひ、神戸市と協議を行い設立したのです(実際に運営できるのは1月15日以降です)。

ボランティアでこのような事業展開をしているのは初めてです。神戸より発進して今、日本全体にこのような事業が広がっていくことを願ひたいと思っています。在宅福祉の三本柱が貧弱な現状にある今においては、ボランティアでもできることを担って、少しでも高齢者・障害者が安心して生活できるように援助したいと思ひます。

これからのボランティア活動は「今を常に査定し、私たちにできることは何か」を考えながら、今後もボランテ

ィア活動を続けていきます。そして全国に広がるボランティアの皆さまとネットワークを作り、内容ある真のボランティア活動ができることを願ひて止みません。

(阪神高齢者・障害者支援ネットワーク

副代表 黒田裕子)

## 仮設をグループホームに

### 改修工事始まる

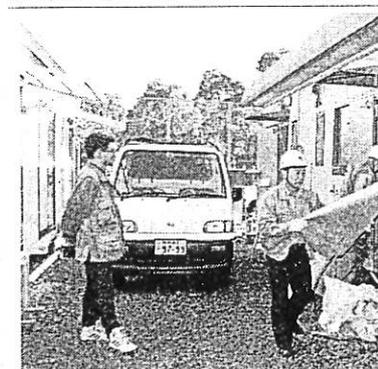
神戸・西区の被災地初の試み  
高塚台住宅

仮設住宅を痛ほう症の被災高齢者のためのグループホームに。神戸市西区の高塚台仮設住宅で、仮設で暮らす痛ほう症のお年寄りたちが看護やボランティアの支援を受けながら暮らす「グループホーム」に改修する工事が始まった。住民が移転し、空き室となった一棟(八戸)を利用するもので、被災地では初の試み。

(青山 真由美記者)

神戸市によると、今年8月末で移転先が決まっていなかった仮設の痛ほう症の高齢者は四十三人。改修は、恒久住宅に移転するまでの間、ケアが必要なお年寄り数人を一カ所に集め、ボランティアが支援しやすいように仮設の構造を変える狙い。

工事は同市が、運営はボランティア団体「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」がそれぞれ行う。運営費は、阪神・淡路コミュニケーション基金とソニー生命が援助する。各住宅の台所とろを撤去して共用廊下に改修し、二戸はスタッフルームと交差する。



仮設をグループホームに改修する工事が始まった＝神戸市西区、高塚台仮設住宅

## 《仮設は今..》

### 被災地編

阪神淡路大震災から5年目を迎えます。震災から6日後が最大の避難者数で約316,000人でした。仮設住宅入居が始まる2か月後には約70,000人、8ヶ月後の避難所解消発表の時には約2,800人でした。

まる4年が経った今、仮設住宅からはほとんどの方が転居されましたが、約7,000世帯がまだ残っております。大震災に行政は、埋立地や郊外の空き地に大量の仮設住宅を建て、区画整理を優先し、復興住宅の建設用地の確保に懸命でした。コミュニティの崩壊や孤独死など被災者の大きな犠牲を避けるのならば、「居住地の近くに、仮設住宅や復興住宅を建ててほしかった。顔見知りが多いことが、いかに心強いかな。近くの仮設に住んでいたなら、幾人かは仕事場の再開が出来たかも知れない。」いまだに瓦礫の空き地が広がる旧市街地を見るにつけ、そう思います。遠くの仮設住宅での生活が、3年10ヶ月過ぎました。長い月日でした。

多くの方が、元住んでいた所へ帰ることをあきらめ、郊外の復興住宅に入居されました。今、仮設住宅に残っておられる方の中には、「わしら50歳以下の一人暮らしから、復興住宅に申し込む資格が無いんや。仕事も無いし、いったいどうすればいいんや。」と言われる中年男性がおられます。また「復興住宅は、五年後から家賃が上がり、支払えなくなるのが目に見えてるから申し込めない。」と言われる方も。高齢者の中には、強引な復興住宅の斡旋についてのつてしまい、転居したけれど知合いも無く、閉じこもっている方も。「仮設は、空き家だらけで、夜になると心細い。早く引っ越したい」と民間のアパートに引っ越されたおばあちゃんもおられます。体調を崩されている方もかなりおられるようです。そして高齢になると引越は大変で、ボランティアの手伝いは、ありがたそうです。

9月から3月まで使用期間が延びたとはいえ、まだ入居先の決まっていない方は、不安が増しておられるようです。



(被災地NGO協働センター

フェリシモプロジェクト担当 伊丹ルイ子)

## 村井くんの『裁判傍聴記』

今年1月21日、尼崎市で、仮設住民の男性が父親を殺害し、本人も手首を切って自殺をはかる痛ましい事件がありました。3月20日より神戸地方裁判所尼崎支部でこの事件の裁判が始まり、10月30日、懲役2年の実刑判決が言い渡されました。

### 尼崎嘱託殺人事件に思う

「じやりみち」前号で、本事件について触れましたが、今号でも少し書いておきたいと思います。10/30の判決の後、朝日新聞紙面に3日連続(11/25~11/27)で、この事件について書かれており、その記事を読んで感じたことです。

裁判で、白川健二さんは当時87才の父の介護の日々を振り返って「父を片手で抱えて、水に流されていくようなもんで、途中で浮草にすがったような生活を続けていましたから、もう先のことはわかりませんでした。」と述べられたようです。震災から実に3年という長い間「仮の住まい」を余儀なくされ、「水に流されていくような」生活が続いたのだらうと推測できます。ここで力尽きたことを誰が責めることができでしょうか。

また、次のようなことも書かれています。白川宅には「生活支援アドバイザー、保健婦、民生委員、デイサービス関係者、仮設住民……と意外に『多

く』の人が訪れていた」と。

「水に流されている」二人に対して川岸から声をかけたかもしれないが、川岸に引き上げるべくロープ(命綱)は投げられなかった現実が浮かび上がっています。

ロープはあっても、投げるまでに手続きが多すぎるのでしょうか。“浮草”ではなくしっかりとつかまえることができる大木が水の中にあれば、と悔やまれてならない。

せめて、夢であつても、もう少し泳げば大木が見えるという絵が描ければ、生きる力になったかもしれない。震災から被災者の多くは「先のことはわからない」状態がずっと続いてきたとも言える。「もし~たら」「~かもしれない」ばかりの現実に無力感を覚えるのは私だけではないでしょう。

(被災地NGO協働センター 村井雅清)

## 「いま」被災地でこんな会合が開かれています!?

ご存知の方もおられると思いますが「フェニックスプラザ」という場があり、その中に「被災者の生活復興に向けた支援活動に取り組む団体が交流や情報支援を行う場」として「生活復興NPO情報プラザ」というものがあります。この情報プラザの運営についての『会』のことを紹介したいと思います。情報プラザの事務局は県民ネット事務局が担っているのですが、事務局から「情報プラザの運営は官民協働型でやりたい」という申し出があり、集まった支援団体が「意見交流会」として参加していました。交流会では・民間主導でやるべき・運営委員会を作って運営する・参加していない団体の方が多いためもっと参加を促す呼びかけをするetcと活発な意見が出されて、取りあえず登録団体にアンケートをとることになりました。アンケートの内容は施設の拡充を含め、運営の在り方についても聞いています。

さて前回12/2の会で、今後この会を運営委員会という形にするのか運営協議会なのか、このまま意見交流会なのかを話し合いました。参加者の中からは・運営

委員会になると特定の人達だけで進められるというイメージになる・情報プラザがどこにあるかも知らない・単純に印刷機や紙折り機を使えたらいい等様々な意見が出されて、結局当面は「意見交流会」とし、今回のアンケートを出す主体は「意見交流会参加者有志一同」とすることで合意されました。このように緩やかな緩やかな会合で誰もが参加しやすい場にしようということで、今のところは進められています。毎回参加して感じることは、本当に民間で主体的に運営を担おうとするならば根気よく責任を持って、さらに身の丈にあった主体性を明確に打ち出しながら、大事なことは情報公開、合意形成、主体性の確立というプロセスを共有することであると感じています。

関係団体の皆さんは登録しているだけではなく可能な限り参加し、この大事なプロセスを共有しませんか?

(勝手に「情報プラザ」運営のための意見交流会に参加を呼びかけている一人  
村井雅清)

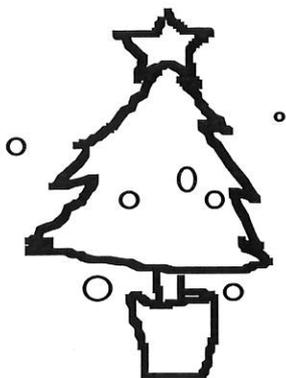
## 入居7000世帯割る 県内仮設

兵庫県は7日、今月1日現在の仮設住宅の入居状況をまとめた。それによると入居者は7000世帯を切り、6774世帯となった。ピーク時の1995年11月と比較して、約4万世帯が恒久住宅に移行したことになる。

まとめによると、仮設住宅の契約戸数は、同日現在で7192戸。このうち、倉庫代わりに利用し、入居実態がない仮設は418戸で、先月から約80戸減少した。

復興住宅の完成で、引っ越しのピークを迎えており、11月1ヶ月間に恒久住宅へ移った人は、仮設住宅がもっとも多い神戸市で約1000世帯。西宮市が約140世帯など計約1200世帯だった。また津名郡一宮町の31世帯が、三田市でも1世帯がそれぞれ退去し、入居者はいなくなった。

(1998年12月7日 神戸新聞夕刊)



### 自治体ごとの入居者数

神戸市	5,569
西宮市	945
加古川市	85
尼崎市	52
姫路市	50
大阪府	17
その他	56
合計	6,774

(12月1日現在)

## 神戸市 仮設期限延長せず

### 「3月末強調」6月まで移行措置

神戸市は8日、来年3月末に迫った仮設住宅の供用期限について、「期限はあくまで3月末」と強調し、現時点では「延長は考えていない」ことを明らかにした。期限切れの時点でも約3700世帯が残る見通しで、6月末までに公営住宅に移転する約2000世帯に対しては、移行期間と見なして弾力的に対応する方針を示した。

同市の金芳外城雄生活再建本部長が、神戸市決算特別委員会でも答弁した。

神戸市の管理する仮設住宅の入居者は、11月末時点で6150世帯で、ピーク時の20%以下となった。公営住宅が完成せず、入居待ちや行き先が決まっていない世帯もあり、来年3月末の仮設の入居期限がきても、約3700世帯が残る見通し。

同市は「仮設の供用期限は3月末まで。期限延長を考慮しているわけではない」と答弁。ただし来年4-6月に、公営住宅が完成し移転する世帯が約2000世帯に達することから「この3ヶ月間は切符を持っている人には何らかの移行措置を取りたい」と、期限切れ後も移転までの間は仮設住宅の使用を認めていくという。

公営住宅がまだ決まっていない約800世帯などに対しては、将来発生する公営住宅の空き室や民間賃貸住宅への一時移転制度を利用しながら「住宅斡旋に全力を挙げたい」とした。

また同市は、仮設住宅の倉庫利用や契約者以外の利用について、「悪質な場合は、県と相談して法的手続きを含め検討する」と強い姿勢で臨むことを明らかにした。

(1998年12月9日 神戸新聞)

一月十六・十七日は  
神戸でお会いしましょう！

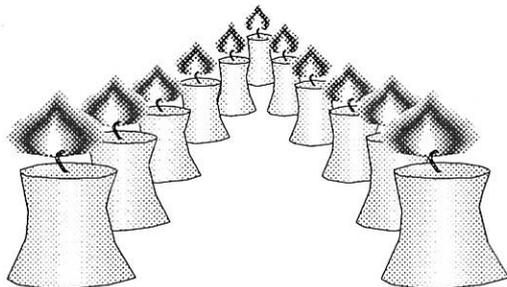
皆さん、いよいよこの季節がやって参りました。

今回は、16日にシンポジウム、17日には「KOBEに灯りを」と題して市役所南の東遊園地で鎮魂と再生のローソク追悼を行います。

今回は、ボランティアも“参加者”としてみんなで作っていきこう!というものにしようと企んでいます。是非是非参加して下さい。

当日来られるという方は、被災地NGO協働センター 鈴木まで。

ご連絡をお待ちしております!!



## 阪神・淡路大震災4周年シンポジウム

「復興への“踊り場”から探る5年目への道筋」

日時：1999年1月16日(土) 13:00~17:00

場所：神戸市民勤労会館

主催：市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会

今年1月開かれた「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」で、「市民がつくる復興計画」が策定されました。これをもとに北海道から九州まで、全国各地で深めた議論を中間的に総括し、併せて復興の“踊り場”と言われる被災地の新たなスタートに向けて、4年目の節目に当たってシンポジウムを行います。

## 「1.17 KOBEに“灯り”を」

日時：1999年1月17日(日) 13:00~17:00

場所：東遊園地ほか市内各地

主催：「1.17KOBEに“灯り”を」ともす会

三宮の東遊園地をメイン会場に、西神第7仮設やJR新長田駅前の「ピフシ」他で、鎮魂と再生の祈りをこめたローソクを灯す集いを行います。東遊園地では13時から竹筒とローソクの準備作業を行い、薄暮の頃、8,000本のローソクに一点火を行います。

## 第1回「こうべi(あい)ウォーク」

日時：1999年1月17日(日) 13:00~17:00

場所：JR鷹取駅前~三宮・東遊園地

主催：神戸復興塾

JR鷹取駅から三宮まで、徒歩で被災地を横断するイベントです。ともに歩くことを通じて、参加者が持ち寄ったお金をボランティア基金に寄付するのが目的。コースには震災復興区画整理地区、再開発地区、再建に取り組む市場や商店街、建て替えられた学校や公営住宅が含まれ、その後の被災地の様子をまとめてみる事ができます。

## ご入会ありがとうございました

(敬称略・'98年11月29日~12月24日)

【個人会員】椎野 修平, 渡部 智暁

【団体会員】宋泉寺

【賛助個人会員】安井 章員, 田辺 ふみ子

新規入会・継続会費については、お気軽にセンターまでお問合せ下さい

## 新規会員募集 & 継続会費納入のお願い

- ★団体会員 年会費 ￥10,000×1口以上
- ★個人会員 年会費 ￥3,000×1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ￥10,000×1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ￥3,000×1口以上
- ☆自由選択会員 任意の額

## センターの動き 12月

- |   |  |
|---|--|
| 12/ 2(水) しみん仕事づくり研究会会議<br>NPO情報プラサ                          | 12/16(水) しみん仕事づくり研究会会議                       |
| 12/ 3(木) センター会議   | 12/17(木) 「しみん基金・KOBE」設立準備委員会                 |
| 12/ 4(金) 市民とNGOの「防災」国際フォーラム策定委                              | 12/18(金) センター会議                              |
| 12/ 6(日) 財源開発フォーラム(エイドの会)参加                                 | 12/19(土) 東京経済大学リーディングプログラム<br>プロジェクト結ぶセミナー参加 |
| 12/ 7(月) 甲山町(広島県)研修受け入れ<br>緊急支援活動研究会<br>フェリモプロジェクト事例検討会/忘年会 | 12/20(日) 防災キヤリング'99fromかながわりーディングプログラム       |
| 12/ 8(火) 1.16,17ボランティアミーティング                                | 12/21(月) 中米ハリケーン支援報告会                        |
| 12/10(木) センター会議   | 12/22(火) みらい仕事研究会(東京世田谷)リーディングプログラム          |
| 12/11(金) 三加和中学校(熊本県)リーディングプログラム                             | 12/24(木) センター会議<br>じやりみち58号発行                |
| 12/12(土) 新潟県リーディングプログラム                                     | 12/25(金) 1.17打ち合わせ/3うそく作り                    |
| 12/13(日)~16(水) 神戸県民市民活動展示出展                                 | 12/26(土)~27(日) 震災がつなぐ全国ネットワーク役員会             |
| 12/15(火) 1.16,17ボランティアミーティング                                | 12/28(月)~1/6(水) パパアニューギニア津波災害視察              |

12月29日(火)~1月5日(火)はセンターはお休みです。  
緊急の連絡は村井携帯030-160-3816へ  
お願いします。

# ぞう通信。

発行所：神戸市中央区東川崎町7-2-6 〒650-0044  
被災地NGO協働センター

第11号 1998. 12. 24



## ♥おかげさまで第11号！！♥

今年は皆さんの暖かいご支援により、まけないぞうは大きく育ちました。そして、たくさんのごことを学ばせて頂きました。本当に全国の皆さんありがとうございました。どうぞゆるやかなつながりの中、来年も引き続きよろしくお願いたします。

### 作り手からのメッセージ

ぞうさんを作り始めて、友人との輪ができた事、友人が友人にと広がっていく事。  
ぞうさんを作っていると苦しいことや辛いことも忘れてしまう。  
ぞうさんができあがると、気分がなごみ、またがんばらなければと思います。  
本当にぞうさん、ありがとうございました。  
(神戸市東灘区・女性)



今日、とある店でまけないぞうタオルを買いました。これがうわさの「まけないぞう」。だんと思いつつ袋からとり出しそのぞうさんの顔を見たとき、私はこみ上げてくる涙を抑えきれませんでした。あのぞうさんの目が私に語りかけているものがありました。震災の恐怖、それに続くさまざまな辛い体験にもかかわらず、あのぞうさんはあたたかいです。「まけないぞう」を使っている間じゅう何かを教えられるのかもしれない。ありがとうございます。

(大阪府箕面市・女性)

### 応援メッセージ

過日は、長女が通う中学校での文化祭のうち、PTAが主催する場で「まけないぞう」を販売させていただきました。事前に趣旨も含めたお知らせを配布し、当日の販売コーナーでは震災に関する絵本、児童書もおきました。

お天気にも恵まれ、短い時間で100ヶの「まけないぞう」賛同して下さる方々のもとへ胸に抱かれて各々へとちついていきました。

私達にこのような活動・出逢いの場を与えて下さったことをとてもありがたく思います。

後日、反省会の折、被災され福岡の御子さんの所へこられていらっしゃる方が目にされてとても喜んで下さったという事を伺って…こちらがありがとうございますをお伝えしたいくらいでした。

私が新聞で出逢ったぞうさんが多くの人々の生活の中に息づいていて神戸で生活されている方々と同じ時間を共有できることを…「ありがとうございます」

手にとられた方からまた広がりが…と願っております。

(福岡県福岡市・女性)

私たちはまけないぞうを通して、様々な「ありがとう」に出会いました。このことは大変大きな学びと気づきでありました。なにげなく使っている「ありがとう」という言葉ですが、ただ何かをして「ありがとう」といわれ、受け身ではなく何かをさせて頂いて「ありがとう」と言えるような関係を築いていきたいです。

\* 五万頭を超える「ゾウ」たちが、被災者の思いを全国に運んだ。阪神大震災の被災地に贈られたタオルが一枚ずつ、ゾウの顔を持つ手拭きタオルに変わり、買われたいく。  
名付けて「まけないぞう」。仮設住宅などに住むお年寄りや、神戸市長田区の靴工場に働く女性など約100人がタオルの片端を丸め、頭と鼻、耳を縫い上げる。  
昨年夏、兵庫県西宮市内の仮設住宅に住む



女性たちがアイデアを出し、この手仕事が始まった。活動を支えるボランティア団体「被災地NGO協働センター」(神戸市中央区)の細川裕子さんは「一つ作れば100円。多い人で月三十五万円の収入になります」と話す。  
作り手からは「負けずがんばるぞう」と、愛を込めて話しかけています。「気が入りまき、買い手からも反応がある。一気に入りまき、二回洗ったら目が取れた。しっかりと縫ってね」。それがまた、励みになる。

仮設住宅に入居している世帯は、今月初めで約八千世帯。ピーク時の五分の一以下になったとはいえ、元々の生活に戻れないお年寄りや、雇用不安を抱える人々の悩みは深かった。取材のため被災地に連日通った。冬が近づくと、寒かった「あの日」の記憶がよみがえる。間もなく四年。被災者と、被災地を忘れない全国の人々との交流の輪。神戸から届いた便りに心温まった。  
(高野 清見)

(98年11月16日 読売新聞)▲



### タオルの豆知識

タオルの語源は？  
スペイン語のトアーリヤ(toalla)か、フランス語のティレル(tirer)からきた言葉だといわれています。  
元は浴布といった意味ですが、現在は布面にパイルを持つテリー織りのことをタオルと読んでいます。